

◆連載-Vol.26

# 現代建築ヤブニラミ

中谷 正人 (建築ジャーナリスト)



## 執筆者プロフィール

**中谷 正人** (なかにに・まさと)  
1948 神奈川県生まれ。1971 年  
千葉大学建築学科卒業、『住宅  
特集』『新建築』編集長を経て  
1994 年からフリー編集者。  
1999 年~2014 年千葉大学客  
員教授。木の建築フォーラム理事、  
日本建築学会建築文化事業委員  
会幹事

## 現代建築の開拓者たちとその軌跡 8

### 戦争が加速した社会の変化

建築の様式が変化するには様々な要因がある。異文化との遭遇によって触発されるもの、技術の進歩によって開発されるもの、社会のニーズの変化によって生まれるもの。これらの要因によって徐々に変化してくるのだが、多くはその結果として生じる社会状況によって左右されると言ってもいいだろう。

ここ100年ほどの間で最も大きな変化が生じたのは、第一次世界大戦と第二次世界大戦を契機としてであろう。歴史的に見ればギリシアとペルシアが戦ったペルシア戦争、これはヨーロッパ社会とアジア社会との衝突でもあった。その後のルネッサンスにおいてもヨーロッパ諸国によるアジアの植民地化やアメリカ新大陸の発見と征服がその背後にあり、血生臭さは拭いきれないが、戦争が結果として異なった社会との衝突であり、それが芸術や技術などの交流を生み、社会の変化を加速したと言えるだろう。

### 日本における建築様式の変化

日本における建築様式は、明治になって急激な変化を遂げた。ヨーロッパでは最新の流行だった様式建築が、日本ではこれを導入した明治政府の権威の象徴となった。そして建築教育の場面でも木造は一顧だにされず、西洋建築が幅をきかした。

モダニズム建築が導入されても、デザインではなく構法として採用され、デザインの王道は様式建築であった。建築においては官庁建築が主流であり、民間の建物は用途に合わせて使えるものならば良い。それに応えたのが合理性と機能性であったのだから、日常の世界では当然のように普及していったが、これらは建築として捉えられていたかどうかは疑わしい。

ところが第二次世界大戦終戦とともに既存の権威が瓦解した。それまでは雑草のようにしぶとく根を張ってきたオフィスビルをはじめとする町中に溢れる建物群が都市を形成する重要なファクターとなった。

ここでは主義主張など関係なく、合理的で機能的、つまり経済的であればよかった。いや、それだけではない。現代建築というイメージさえ伴っていればよかったのである。

すでに明治以降の建築世界の状況は記してきた。その上で、

現実にはどのように対応してきたのかについて考えてみよう。

明治以降、日本の建築教育はヨーロッパを手本として、新古典主義の様式建築を導入し、庁舎、銀行、博物館などの公共建築が主流となった。しかし、一方で大工などの職人たちは見様見真似で新しい様式を伝統工法で模倣したことも記した。

しかし、これを別な視点から見ると、それまでの歴史と同じことの繰り返しでもある。果たして日本を原点とした、様式と呼べるような建築のスタイルはあったのだろうか、という疑問がある。朝鮮半島から、あるいは中国などの大陸からもたらされた建築様式から、徐々に日本らしきものへと変質させていったのではないか。それ以前の高床式などを見ると太平洋を国際路線とした東南アジアからの伝播もあったに違いない。

おそらく「舶来モノ」をありがたがるのは、人類の習性かもしれない。それは利休が愛した「ルソンの壺」などもその好例だろう。ところが、それを求めて海外に進出するのではなく、自家菜籠中のモノとしたのが、日本の伝統的な様式の歴史ではなかったか。

これが明治時代にも通用するのである。いや明治以降も連続と続いてきた。藤森照信から聞いた話であるが、1896年に完成した岩崎邸(国指定重要文化財 設計:ジョサイア・コンドル)は来客用の洋館であり、住居としての母屋は武家屋敷の形式で建てられていた。

武家屋敷とは南側に居室が並び、北側には中庭を挟んで女中部屋や納戸などが並び、中庭には池が配されて、いわば寝殿造りをコンパクトにしたような構成である(ここでもオリジナルからの変容が起こっている)。その離れに洋館が建てられた。もちろん母屋は裸足だが洋館ではそうはいかない。そこで大量のスリッパが活躍したというエピソードになると藤森の独壇場、ここでは触れまい。

藤森によれば、大正時代の代表的な住宅の平面とされる「中廊下式」は、これらの要素を簡略化しコンパクトにしたモノで、中廊下は中庭の名残、玄関脇のベイウィンドウを持った洋間は洋館の痕跡だという。

藤森の説に従えば、住宅の平面形式においても、外来の形を取り込んで新しい形式を生み出したともいえるのではないか。

## 社会のニーズに応える建築家たち

このような流れが現代建築にも当てはまる。モダニズムの基本的な論理である機能性と合理性は、新しい社会のニーズに対して、非の打ち所のない理論武装となった。前にも記したように、提唱者であるミース・ファン・デル・ローエも、コルビュジエも、建物をどのように造るかという製作手法を述べたのであって、建築とはどのようなモノかという点については、ほとんど口を塞いでいたように思う。

ところが、ミースもコルもデザインが美しかった。それは形式を純粋に表現することによって得られる形式美だった。

どんな建物でも形式だけでは機能を果たすことはできない。様々な要素が付加される。ここに機能や合理性以上のモノを加えようとしてきたのが、これまでに述べてきた戦後から1960年代にかけての建築家たちの軌跡である。彼らは地方性や風土性あるいは固有性をそこに加えようとした。またあるときは最新の構造技術や素材なども可能な限り注ぎ込んだ。

## 純粋モダニスト、堀口捨己と土浦亀城

一方で、モダニズムを純粋な形にしようと試みた人たちもいた。堀口捨己などは1920年に東京帝国大学建築学科卒業、同大学院で近代建築史を専攻したためか、やがて分離派建築会の運動を興して建築表現に重きを置き、日本の伝統とモダニズム建築との統合を図った。

その堀口の初期の作品が「紫烟荘」（1926）である。その後の堀口の作品に多く見られる壁面と開口部の構成パターンは、どこか懐かしさがあり、これぞ大正モダンではないかと思わせるのだが、そこに起りのついた草葺きの屋根が載っていた。

この当時、建築界においてはまだ民家が研究対象とはされていなかった時期ではあるが、1918年には今和次郎の『民家図集 第一輯 埼玉県』が白茅会から上梓されていたので、学生時代の堀口が読んでいた可能性は十分にあるし、1949年には『利休の茶室』で日本建築学会賞論文賞を受賞したほど伝統と歴史とをしっかりと押さえていた。

しかし、その後の実作では純粋なモダニズムと呼べるような作風となった。

堀口の2年後輩にあたる土浦亀城も、モダンデザインが明

るい明日を拓くと信じていたと思わせるデザインである。学生時代に「帝国ホテル」（1923）の設計を手伝った縁でフランク・ロイド・ライトのスタッフとなり、帰国後大倉土木（現大成建設）に所属しながら住宅を手がけていた。

土浦の代表作はなんと言っても1935年の「土浦亀城邸」であろう。白いキュービックな外観と水平に張り出した庇が特徴的である。ところがいったん内部に入ると空間がゆったりと膨らむ。1階床から屋根まで届く大きな吹抜けを軸として、すべての空間が流れるようにつながっていくのである。天井の低いアルコーブは吹抜けと連続することによって、天井の低さがかえって落ち着きを与えている。ここを訪れたとき、居心地の良さに一瞬アルヴァ・アアルトの自邸を連想してしまった。

しかし、木造で陸屋根である。この理由について土浦は「技術も進歩した時代に、いまだに勾配屋根を載せてるのは晴れた日に傘を差しているようなもの」と言い放ったという。もちろん、その結果は読者諸賢のお察しの通り。

今回触れたこれらの建築家たちのスタンスは、固有性や地域性というニーズに応えるより、むしろデザインの抽象化、象徴化に向かったように私のは思える。

## 地方のサムライ

このように活躍した建築家たちのほとんどは東京に軸足を置いていた。しかし大都市圏を離れ、特定の地域だけで素晴らしい仕事を続けた人もいた。例えば愛媛県では松村正恒だ。土浦亀城のスタッフとして働いたこともある松村は故郷へ戻り、戦後は八幡浜市役所の職員として学校や幼稚園などの教育施設から病院まで、多くの公共建築を手がけたが、一切プライベートな仕事はしなかったという。

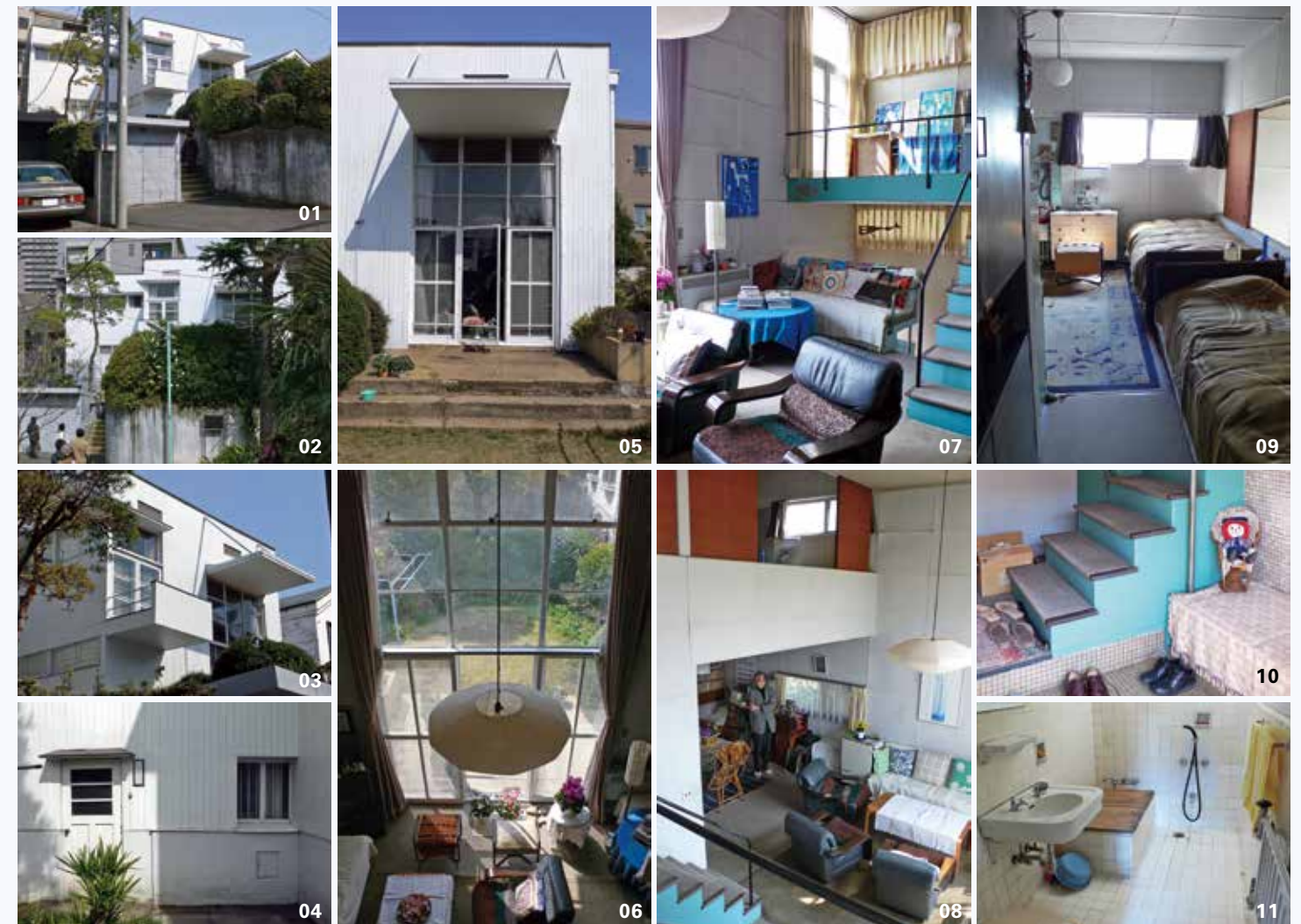
代表作ともいえる木造の「八幡市立日土小学校」（1958）は重要文化財に指定された。空間のつながりはゆったりとしており、廊下から各教室へのアクセスは穏やかな雰囲気にあふれている。裏を流れる小川に向かって張り出した2階のバルコニー（これについては後日談がある）などには遊び心も感じられる。

1960年、『文藝春秋』の「建築家ベスト10」という特集で、松村は丹下健三などと並んで日本を代表する建築家に名を連ねている。この当時の建築界において、松村の名前を知って

いた人がどれだけいたのだろうか。

松村は気分によって「無休建築士」「無給建築士」という肩書きを使い分けていたという。植田實が編集長を務めた「住まい学体系」全100冊の60番目に『無休建築士自筆年譜』（1993）が納められており、刊行記念会を松山で開催するはずだった。ところが刊行1週間ほど前に本を見ることなく亡くなってしまい、出版記念会が追悼記念会となってしまったのは残念だった。

## 土浦亀城邸



01 前面道路から見た全景 敷地は前面道路より高くなっており、階段を上がって玄関にアプローチする 02 背後には屏風のように高層マンションが立ち並んでしまい、当初の面影は知るよしもないが、緑の低い丘の上にフワッと降り立った白鳥のイメージがあったのだろうか 03 吊られた庇が大きく張り出している 04 勝手口は玄関の脇に奥まって設けられている 05 庭から見た大開口部周りのデザインは禁欲的でありながら、どこか親しみを感じてしまうのはなぜだろうか 06 寝室からの吹抜け見下ろし。写真ではコントラストが強すぎるが、明るく開放的な空間である 07 居間から玄関、その上のアルコーブを見る。玄関からさらに階段を上ったレベルに居間が設けられている 08 アルコーブから居間を見返す。居間の奥にダイニングがあり、その上が寝室となっており、吹抜けに面して開口部が設けられている 09 寝室。右手の開口部が吹抜けに面している 10 壁際にはベンチが設けられてゆったりとした玄関ホール 11 白いタイル張りの浴室にはトップライトが設けられている (撮影/筆者)